

## 回顧録

社会事業学専攻第一回卒業生・志村卯三郎  
についての補遺加藤博史<sup>†</sup>

1931年4月、同志社大学文学部神学科に社会事業学専攻が設置された。大学では日本で初めての「社会事業学」専攻であった。その第一回目の入学生に志村卯三郎がいた。志村は、1904年山梨県の生まれである。甲府商業を出て大阪商船に勤務ののち陸軍に入隊し近衛騎兵連隊に配属されていた。芦屋協会の長谷川たかし牧師との出会いから1926年に受洗。関西学院を出て、同志社入学当時は27歳であった。入学と同時に志村は、京都市南区西九条大国町（鳥羽高校の南）で「洛南基督教団」を設立し、当時スラム街であった一帯のセツルメント活動を行っていった。このセツルメントで志村の指導を受けていたのが、当時京都帝国大学医学部の学生であった榎本貴志雄（1915-1989、同志社中学出身、南京で施療施設「朝天医院」を開設。戦後賀川の推薦で京都府平安病院に勤務。住谷悦治、豊田慶治、大塚達雄、小倉襄二らと底辺売春婦である「街娼」の調査を行う。嶋田や住谷馨とともに「社会福祉問題研究所」を主宰。）であった。榎本は志村とともに露天での日曜学校を、学校に行けないスラムの子どもたちのために開いたりしている。

志村の1年後輩に、嶋田啓一郎がいた。二人とも賀川豊彦の思想的影響を大きく受けていると思われる。1937年8月から10月にかけて、志村は、日本基督教連盟慰問部より中国北部に派遣されている。北京では同志社の先輩の清水安三（1891-1988、1915年同志社神学校卒業、北京でセツルメント「愛隣館」と女学校を経営していた。戦後、賀川の支援で桜美林学園を開設。）に歓待され宿泊している。志村は翌1938年に京大医学部基督者の会中心に「中国難民救済施療班」を組織し、8月から上海での医療ボランティアを開始している。その後も志村は中国難民救済施療団団長として活躍し、今日の「日本キリスト者医科連盟（JCMA）」、「日本キリスト教海外医療協力会（JOCS）」の父と慕われていく。志村は戦後も非戦を唱え、世界連邦運動に参画するなど地の塩のような活動を続けた。

常々、志村を尊敬していた私は、本井康博同志社大学教授から志村が健在であること

<sup>†</sup>1968～1974年在学

を聞き、関連教会を通して青梅市の成蹊園という介護老人福祉施設に入所されていることを知り、奥様の康子様に無理をお願いして2005年12月21日、志村を訪れた。やがて102歳になろうとしている志村は、たまたま体調が良く、私の「志村先生は私たち後輩の誇りです」との言に、朗々とした声で「ほこりはほこりでも、叩けば出る埃です。汚い埃にならないようにせねばなりませんなあ。加藤先生の手は温かい。どうかお元気で」と笑いながら温かく手を握り返してくださった。すでに寝付かれることが多いと聞いていたが、ときどき教会で説教しているときを思い出される様子も見られた。中国での活躍の思い出は聞けなかった。

志村は2007年7月6日、103歳と6か月の天寿を全うして召された。妻に遺した「臨終言」の一部を最後に引く。『この地上の生は肉と共に限りがある／限りがあればこそ尊いのだよ／この肉の衣に執着しては／新しい霊体、霊の衣は着れないんだよ／「キリストを着よ」と言うみ言葉もあるね／キリストを着た人生にはもはや死がないんだよ／栄化の霊妙は懼れではなく恩寵なのだよ／悲哀ではなく悠久の生への大歓喜のすすりなきなのだよ。』

志村は、妻に自分の臨終に際して涙を見せるのではなく、微笑んでほしい、そして天国の城門を堂々と進んでいく自分の勝利の足音を聞いてほしい、妻の唇から賛美の歌があふれることを祈り続けると結んでいる。志村の生は良心の全身に充満したものであった。